

山田景隆を中心とした年表

- 建武2年（1335年） 山田頼範が三河国設楽郡武節に移る（武節古城か）
- 永正年間（1504年－1521年） 田峯城の菅沼定信が武節城を築いたとされる
- 永正9年（1512年） 山田景隆が生まれる
- 享禄元年（1528年） 山田景隆の祖父（山田貞義）が川手城に移る
武節古城はそのまま保持
- 天文元年（1532年） 川手良則が生まれる
- 天文20年（1551年） 山田景隆は今川家における三河方面の奉行人。
（松平甚太郎（忠茂）宛に「山新 景隆」名儀で飯尾乗連（豊前守）・二俣持長（近江守）らと連署を加えた血判起請文が知られている。文書の内容から山田景隆ら連署の3名は三河方面の今川方諸士に対し軍事指揮権を持っていたと推測されている）
- 天文22年（1553年） 山田景隆が大日如来を祀る
- 弘治元年（1555年） 岩村城が武田と同盟関係
武田信玄が下条信氏に武節城の攻略を命じる
（飯田市美術館 研究紀要 23）
- 弘治2年（1556年） 下条信氏が清水城（名倉）、武節城（武節谷合戦）、白鳥城（津具）を1日で落とす
清水氏は逃れて生存。武節古城などに逃れたか？
清水氏（名倉 清水）が気賀に移り住む
→ 清水城が落城すると、新野左馬助親矩が新田友作（名倉伊茂）を呼んだので、気賀に移り住む。
（1日で3城を落とす早業では、武節古城等の小城までを攻める時間的余裕はないと思われ、武節古城は落城していないと思う。清水氏はこの武節古城等に避難していて無事？。
- 弘治2年（1556年） 武田信玄が三河北部を攻め、根羽、津具、河内大谷、武節を武田領に加える。（飯田市美術館 研究紀要 23）
- 弘治2年（1556年） 山田景隆は今川方岡崎城代
- 永禄元年（1558年） 船戸橋（三州名倉）の戦い。 攻めは遠山、守るは奥平貞勝
遠山がどのルートで船戸橋に行ったか。（最短ルートでは、山田氏の支配地を通過する必要があると思われる）
- 永禄3年（1560年） 桶狭間の戦い
山田景隆が岡崎城から川手城に逃げ帰る
—この頃の岡崎城代は山田元益（桶狭間で討ち死？）との説があり、山田景隆との関係が問題である。

- 一山田景隆が三河方面の指揮官として岡崎城に在城？
- 一岡崎城に指揮官の山田と城代の山田の2人の山田がいたと仮定すると、山田元益が「討ち死」と山田景隆が「逃げ帰る」ことが可能となる。）
- 三河方面の指揮官が城代では格の違いを感じる
- 一山田元益の通称は新右衛門尉。山田景隆の通称は新次郎（似ているので、歴史上は2人を混乱しているか）

山田景隆は立野（押山（峯山？））へ蟄居。

（武田信玄から5000貫で調略を受ける→蟄居の直接の原因か？）

- 蟄居場所は、信州の立野説と押山（峯山？）説がある（添付2参照）

同時期に、山田景隆の蟄居により川手城や押山城も廃城となったか（記録では確認できない）

- 山田景善が在城したとする説がある。（景善は下野して川手の山田家の祖となったか）

徳川家康が今川から独立

永禄5年（1562年）

織田と徳川の清洲同盟

徳川から武節城が攻撃を受ける（今川が感状）

永禄6年（1563年）

山田景隆は井伊谷へ（新野左馬助親矩が迎えに行く。（井伊谷へは立野より約18里、約1日行程（井伊美術館HP）。立野（押山（峯山？））であれば、約70kmぐらいと距離的に整合する）

永禄7年（1564年）

山田景隆は、井伊直虎を補佐、次郎法師の後楯となって今川の外様武将ながら井伊谷の支配者となる

永禄8年（1565年）

山田景隆が押山熊野神社と川手大慈院を建立

永禄9年（1566年）

井伊谷徳政令

永禄10年（1567年）

織田信長が美濃を手中に収める

岩村城も織田信長の支配下になる

永禄11年（1568年）

井伊と山田景隆が決別。山田景隆が徳川につく。

山田景隆が三河・遠江両国20余郷の地頭となる

武田の駿河侵攻

永禄12年（1569年）

徳川の遠江侵攻。井伊を落とす

元亀元年（1570年）

秋山虎繁が東美濃の遠山の領地を通して、徳川家康の本拠地の三河へ攻め込もうとした。

結果、以下の合戦。

上村合戦

根羽→大桑峠→小笹原→前田砦（恵那 上村）

平谷→阿寺砦（恵那 飯田洞）

小田子合戦

根羽→小田子→漆原城（恵那 上矢作町）

小田子合戦では援軍として駆けつけた織田信長軍の武将の
明智光廉（三宅長閑斎）が武田を敗北させた記述がみえる。

この明智光廉は何者か？

武節（川手肥後守？）が上村合戦に参加。戦わずして撤退。

→川手肥後守とは武節城主とされた人物で、奥平系の人。

上村合戦の参加者の中に「ぶせち かわて」（甲陽軍鑑）
の記述がみえるが、川手良則や山田景隆では奥平と鈴木
を中心とした軍勢のための整合性に疑問。

また、川手良則は甲斐に、山田景隆は三河に在住の可能
性が大。（鈴木と山田は同族なので、山田の可能性がある
が、わざわざ、「ぶせち かわて」とする意味が不明。

山田であれば、本城の「かわて やまだ」ではないか。

わざわざ、「ぶせち」と書かれているところに意味がある
のではないか。

元亀2年（1571年） 徳川家康が新城で鉛を発見したことによる管沼への特権の付与

元亀3年（1572年） 管沼が武田方につく

元亀3年（1572年） 武田信玄の西上作戦

武田信玄は重臣の山県昌景と秋山虎繁（信友）に3000の兵力を
預けて信長の同盟者である徳川家康の領国の三河に侵攻させた

遠江方面 信玄も2万2000の兵力を率いて甲府から出陣し、
10月10日には青崩峠（または兵越峠）から家康の
所領・遠江に侵攻

三河方面 武節城が戦わずに開城

足助城も落城。（足助城付近の城を含めて）

美濃方面 秋山虎繁が岩村城を攻める

→ この事件の中で川手（山田）の名が登場しないのはなぜか。

三方ヶ原の戦い

元亀3年（1572年） 武田信玄が津具金山から金を採掘開始（1575年（天正3）
まで）。元亀年間（1570年～1573年）という説もある。

その後、織田・徳川は天正10年（1582年）ごろまで採掘。

元亀4年（1573年） 秋山虎繁が岩村城に入る

元龜4年（1573年） 松平信康が初陣で武節城を攻める
元龜3年に武節城は武田氏の配下になった。その後、天正3年まで、武節城に関して情報がなく、この時期の武節城は武田氏の配下のままか。
これを考慮すると、松平信康の初陣は、ないか、又は、天正3年に織田・徳川の連合軍（佐久間信盛と奥平父子（定能・信昌）の武将として参加したと考えるのが自然か。

天正元年（1573年） 武田信玄死亡

天正3年（1575年） 長篠の戦い 武田勝頼が大敗
天正3年に徳川・織田の連合軍が武節城を攻めているので、この時点までは武節城は武田の勢力圏であると思える
武節衆が武田勝頼の1部隊で参加（信長公記）
→山家三方衆の一員か？
武田勝頼が武節城を経由して信濃に退却。
織田・徳川の連合軍（佐々木信盛と奥平父子（夏目勝治等））が武節城を攻める。
織田信忠の岩村城攻め

天正10年（1582年） 武田勝頼死亡
川手良則が徳川家康の命により井伊直政に仕える。井伊家中では一門筆頭。川手良則が井伊直政の姉と結婚
井伊の赤備えは山県（武田配下。旧川手良則の主君）の赤備えを継承したか。
（山田景隆が三河・遠江両国20余郷の地頭であったにも関わらず、僅か2500石程度（後に4000石まで加増）で井伊に仕えたのが疑問。
本能寺の変

天正12年（1584年） 山田景隆死亡（72歳）

天正12年（1584年） 豊臣秀吉が関白

天正18年（1590年） 徳川家康の関東移封で武節城が廃城。廃城は慶長6年（1601年）との説もある。

慶長 5年（1600年） 関ヶ原の戦い（川手良則が高崎城代）

慶長 6年（1601年） 川手良則死亡（69歳）

元和 元年（1615年） 川手良列（良則の養子）が大坂夏の陣の若江の戦いで戦死

寛永 5年（1628年） 川手良富（良列の子）が死亡により川手家は無嗣断絶

嘉永 6年（1853年） 井伊直弼の命で、新野親良の子・河手良貞により川手（河手）家は再興。

最大の疑問は、今川方の三河方面の軍事指揮権を持ち、岡崎城代を勤めた人物の居城である川手城をだれも攻めていない。僅かに調略の話は出てくるが、戦にはなっていない。

川手山田家略系譜に唯一武田信玄が攻めたと載っているが、武田信玄はこの時期に兵を動かした記録が見当たらないので、これは誤りであると思う。

もう一つの大きな疑問は、上記の要職ならば、相当の兵力を持っていたと思うが、川手城はそれほど大きな城ではないし、押山を含めた回りの土地も100軒とか200軒を養う程度のレベル。(年寄り、子供を入れても1000人にはならない。兵力としても1軒に1人が充当されたとしても100人か200人程度)

何かのからくりがあったのではないか。

例えば、川手城の対岸の福原、旧川手城の対岸の森上、門野を含む小田子地区、下村砦の対岸の下地区が領地の候補になるが、これは遠山一族の領地が妥当であろう。

交通の要衝であることによる関銭が答えか

<付録1>

武節城の攻防（5回の攻防（6回？））

弘治2年（1556年）管沼（鈴木？）→武田

下条信氏が武節城を落とす（武節谷合戦）

このあたりに武田から今川に代った戦等が隠れているか

永禄5年（1562年）今川→今川

徳川から武節城が攻撃を受ける（今川が感状）

元亀3年（1572年）今川→武田

武田信玄の西上作戦で武節城が戦わずに開城

元亀4年（1573年）武田→？

松平信康が初陣で武節城を攻める

（この時期の武節城は武田氏の支配下。天正3年（1575年）の長篠の戦い頃までは足助も武田氏の支配下と推察できるので、徳川が武節のみを攻めるのは難しい）戦いは、時期がずれているか、戦いがなかったか？

時期がずれているか（候補は天正3年か）、戦いがなかったのであれば、長篠の戦いで武田勝頼軍に武節衆が参加した（信長公記）記述と整合性がとれる。

天正3年（1575年）武田→奥平（徳川）

織田・徳川軍（佐久間信盛と奥平定能・信昌（夏目勝治等））が武節城を攻める。

徳川家康は、武節城を奥平父子に引き渡し。

（この戦いで松平信康が初陣というのは、徳川本体の出陣がないが可能性はある）

<付録2>

山田景隆の蟄居場所について

信州辰野説と、本文の押山（峰山）説がある。

1) 信州辰野説（安藤先生説）

同族（足助氏）の林氏を頼ったものとの説明。

2) 押山（峰山）説（本文作成者の説）

山田氏の家老とされる太田氏を頼ったか

① 親子共に武田配下の地域に居住するのでは家の存続が危ない。居住地域の特定をばかすために信州立野としたか。

② 河手家系譜の作者が押山（峯山）を信州という認識であったか。（信州根羽（武田支配地）と同じ程度の緯度であるので河手家系譜の作者がそう記述したか）

③ 信州辰野説では、河手家系譜にある「井伊（新野左馬助親矩）が山田景隆を迎えるとき」の状況と距離（井伊へは立野より約18里、約1日行程）が矛盾する。

（逆に押山（峰山）では距離がほぼ一致する）

④ 押山（峯山）は、立野山の西側の麓に位置する。

⑤ 押山（峯山）から根羽方面への街道があったと思われる。（旧道跡が現存）

（武田信玄が山田氏に与えたとされる、「<飯田、駒場、浪合、平谷、根羽根、浪合、小滝、青崩之郷>の内で5000貫」に近い）

注）この5000貫は領地ではないと考える。それぞれ領主が存在するので、商業権のようなものか地頭のたぐいだと考える。（徳川家康が山田景隆に与えたものと同種のものか）

<付録3>

津具金山について（私見）

津具金山を発見したのは、武田信玄の配下ではないか。

武田信玄は、多くの金山経営をしており、常に軍の中（特に新たな土地に軍を進める場合に、金山開発のプロ（金掘衆）を引き連れていたのではないか。

津具に初めて入ったのが弘治2年（1556年）（武田信玄の命令で下条信氏）。このとき、金山を発見したのではないか。（金山を発見したことを示す資料はなく、推察）

武田信玄が稲武や津具の攻撃を命令したのは事実（飯田市図書館の資料）だが、直轄軍ではないので金掘衆まで同行したかは疑問がある所。信玄直接の命令を考えれば、あり得る。

→ 金山を捜すとなると、自由に動き回る必要性と、ある程度の期間が必要。一時的にせその地を占拠する必要があると考える（下條の津具（白鳥城）攻略は絶好の機会だと思われる）。

この金山の発見を受けて（推察を含む）

永禄3年（1560年） 川手氏の調略

→下記侵攻でも、川手氏支配地のみが空白地帯で、喉に当てられた刃のように見える。

元亀元年（1570年） 東美濃侵攻（岩村から小田子）

元亀3年（1572年） 管沼氏の武田帰属

武田信玄の西上作戦

元亀3年（1572年） 武田信玄が津具金山から金を採掘開始

津具の回りのすべてを武田方としてから、安全に金堀人夫たちを投入したのではないか。

北 信濃（武田信玄の支配地域）

南 管沼帰属

西 武節から足助を支配下（川手（押山）の方が北に位置し、川手氏の調略に意味が見える）

東 管沼帰属、遠江侵攻

こう考えると、西上作戦は、京に登るのではなく、信玄の本国経営のための、津具金山の安全確保作戦にも見えてくる。

黒川金山等の算出量が減る見込みの補充、又は、武田一族が戦い続けるための資金（産金）の単純な上乗せのための戦いではなかったか。

何故、武田信玄が、川手、武節、足助を欲しかったかは、金山と結びつける考えもありか。

ただ、弘治2年（1560年）頃に金山を発見したと仮定すると、実際の採掘開始が元亀3年（1572年）であるため、12年ぐらいの時間の説明が必要となり、無理があるか。